

玄武館に思いを寄せて

伊藤 理 恵

(伊藤美帆さん・奈帆さんの母)

「きっとあの建物は何かの道場なんだろうな」と、春木川沿いにある玄武館が私のまだ幼かった頃の記憶に残っています。まさか何十年以上も経った今、私の娘二人が玄武館と出会うとは夢にも描いていませんでした。

長女奈帆が小学校2年の春、上人校区から春木川校区へ引っ越してきました。次女の美帆は幼稚園。なつかしい建物が剣道の道場と知ったのは、家の窓を開けると力強い元気なかけ声が届き、竹刀の音が響いたその時でした。

わんぱくだった美帆の入門を先に決め、2年後の今、奈帆の入門。

様々な想いで入門を決めた母として、この剣道で何を学んでほしいか、いつも見つめてきました。

「強い心」相手の気持ちを知り、自分の心を知る。思いやり そして、「生きる力」を養うための規律、姿勢。

玄武館で出会った先生方からのご指導 そして仲間たち。きっとこれからの人生の学びとなり、立ち上がるパワーとなるように、母として二人の後ろ姿を見守り続けていきます。

玄武館に感謝の想いを寄せ、これからも剣道が娘たちの生きるための一つの道しるべとなるよう願わずにはられません。

全ての出会い、数々の教え、言葉に感謝を申し上げます。



コロナにはまけないぞ

いとう み ほ

(春木川小学校2年)

わたしは けん道をようち園からならいはじめました。

さいしょは、こわくて、なくときもあったけど だんだん、けん道に行くときが楽しみになりました。いっぱい、けん道に行ったので、しょうじょうをもらいました。

道じょうは、2月から春木川小学校にうつります。今はこんなじきだけど、けん道で体をきたえて、コロナにまけないようにがんばります。

高まつ先生も、体をこわさずに、けん道をおしえてください。がんばります。

私と剣道

伊藤 奈帆

(春木川小学校4年)

私は最初、剣道がいやで仕方ありませんでした。みんなと同じように声を出すのがはずかしかったからです。でも、先生方が分かりやすく教えてくれて、だんだん声を出すのもはずかしくなくなりました。うまくいかないこともあったけど、その度に先生方にアドバイスしてもらいました。

今思えば、あんな事で注意されていたのかと思えます。しかし、そう思える自分は少し強くなったのかもしれないです。

たくさん練習するほどうまくなれる、この言葉は、私があきらめそうになったときにいつも心の中で言っています。それは他の事でも同じようにくり返し言っています。

いつかみんなよりもうまくなれるように、私はあきらめないでがんばります。

はじめてのしあい

澤 薫 風

(石垣小学校3年)

ぼくがげんぶ館でがんばった事は、大きな声を出すことです。

さいしょは、声がぜんぜん出なかったけど、けいこをしていくうちに声が出るようになったので、うれしかったです。

ぼくは、冬のけいこは寒いので行くのがいやでした。でもけいこをしていると、寒さがふきとんで、あせが出るようになりました。ぼくはそれでけいこがすきになりました。それからけいこに行く事がふえました。だからだんだんうまくなりました。

ぼくは、コロナでじしゅくしている時に、いえでれんしゅうをして、めんを自分ひとりでつけ、どうぎを着れるようになって、とてもうれしかったです。

自分でめんがつけられるようになって、はじめてのしあいにも出してもらいました。うれしかったです。

これからも、大きい声を出し、もっとしあいにも出られるようにがんばりたいです。

甥に譲った剣道具

加藤 美穂

(三澤薫風君の叔母)

私が玄武館で剣道をしていたのは、二十年くらい前です。通ったのは約3年程度でした。その中で記憶に残っているのは、夏休みの朝稽古で早起きをするのがつらかった事、冬の寒い日は足が冷たくて行きたくないと思っていた事などです。

また、女の子が少なかった事も嫌だなと思っていました。

当時は嫌な事ばかりだったけど、忍耐力や諦めない心、人の話を聞く態度や挨拶する大切さ等、社会人になって働き始めた時に、剣道をやっていた良かった、と実感する場面がたくさんありました。これからもその心を忘れずにいたいと思います。

いま、甥が私の父と一緒に玄武館に通っています。

当時私が使っていた防具をつけてけいこに出掛けて行く姿や、家で素振りをしている姿を見ていると感慨深い思いです。

試合がある時にも嫌がらず毎回通ってえらいなと思うし、けいこで一本とれたときに「一本とれたよ」と嬉しそうに報告してくれた時には、私もすごく嬉しく思います。

私は3年しか続かなかったけど、長く剣道を続けて欲しいなと思っています。



ここも道場

村松 杜子

(境川小学校4年)

私はけん道があまり好きではありません。なぜかと言うと、防具を着けていても、いたくないと分かっているけど、竹刀で打たれるのがこわいと思ってしまうからです。

そのせいで、わざを出すよりも先によけることを考えてしまいます。なので、相手にすぐ一本を取られたり、私が出すわざはなかなか決まりません。

でもなぜ、けん道を続けているかと言うと、「うれしいなあ」と思う時があるからです。それは、先生達がいいつも見てくれていて、ほめてくれる時です。

ほめてもらおうと「こうすればいいんだな」という事が分かります。次は意しきしようと思います。もっとほめられたら自信が持てて、もう少しがんばりたいと思えます。

また、道場には、けん道がなかったら出会うことができない外国の人、話すことのなかった歳のはなれた人、学校や学年の違う友達。このような仲間たちと過ごす時間が、私がけん道を楽しめる理由だと思います。

私がけん道を始めて変わったことは、人前に出ることが少しだけはずかしく無くなりまし

た。それと、人に勝ちたいと思えるようになってきました。

これからの目ひょうは、文武両道です。勉強を頑張って、けん道を少しでも好きになることです。そのためには、いつも一生けん命に稽古をしようと思います。

けいこの場所が変わっても「ここも道場」。教えてもらったことを忘れずに、コツコツ努力していきます。



剣道で学んだ集中力

多 田 壮史朗

(朝日中学校 3年)

僕は小学校2年生から玄武館道場で剣道を始めました。

最初の頃は、瀬々先生から剣道の基本を学びました。一つ一つできることが増えると、高松先生から防具をつけることを許されました。早く面をつけたいと思い、瀬々先生とのけい古をがんばったのを覚えています。

面をつけてから、先生や先輩方の練習にまざりました。その中でも、財前先生とのけい古がととてもきつかったです。そして、いつもはほめてくれない入江先生から、時々良いメンが入った時「良いメンや!」とほめてくれ、とてもうれしかったです。

高松先生は、僕に足の踏み込み方や間合いの取り方を教えてくれました。

また、剣道の事以外にも、孔子の言葉や道場訓なども教えてくれました。

最初は意味が良く分からなかったけど、繰り返し読むことで、だんだん分かってきたように思います。それらのことを通して、集中力や礼儀作法、良い姿勢が身に付きました。

今、僕は受験生です。けい古には行けていませんが、剣道で身に付いた集中力が勉強に生かされていると思います。これからも、剣道で学んだことを思い出しながらがんばります。



弓道部キャプテンとして

多 田 隆之介

(別府鶴見丘高校2年・剣道2段)

自分は、小学校4年から中学3年の夏まで、玄武館で剣道を学びました。

仲間や先生とのけい古や試合等、沢山の思い出がありますが、今でも印象に残っているのは、中3の夏、受験勉強をしながら昇段審査に向けてけい古をしたことです。暑い中、ほぼ毎日、家と塾と道場の往復でしたが、一緒に審査を受ける仲間と指導してくれた先生のおかげでがんばれました。

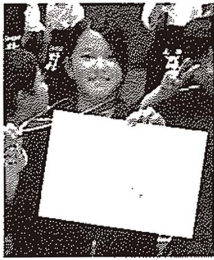
2段に合格できた時は、達成感と共に、頑張れた自分に自信がついた気がしました。

そして高校では剣道部がなかったので、同じ武道である弓道部に入部しました。そこには、剣道と共通する点がいくつもありました。

姿勢や体幹はもちろんですが、特に気持ちの上で通じるのは、残心や礼儀作法です。これは玄武館での指導がなければ、部活だけの指導で理解するのは、もっと遅かったかもしれません。

これらの事もあって、今は鶴見丘高校の弓道部のキャプテンを任せられています。今でも筋トレとして、木刀で素振りをしています。

時々、剣道をしたと思う時があります。玄武館道場はなくなりますが、また、いつかあの時のメンバーや先生方と剣道をしたと思います。



優勝の思い出

荒 金 慶

(鶴見台中学校2年)

私は、お母さんの剣道の稽古についていって見学しているうちに面白そうだな、と思って剣道を始めました。

始めてみれば動きの一つを覚えることが大変だったけど、だんだんとみんなと同じような動作ができるようになるのがうれしかったです。防具を付けられるようになってからは、打たれることもあったので痛いときもあったけれど、先生方はみな優しく指導してくださったので、一生懸命頑張りました。

試合ではなかなか勝てなかったけれど、5年生の時に錬成大会で優勝できたのが一番の思い出です。強くなれなかったけど、玄武館での稽古のおかげできれいな形の剣道ができるようになったのが私の誇りです。

高松先生やたくさん先生方は、見た目はちょっと怖いけど、教えて下さるときは優しくかったです。一緒に稽古をした先輩や仲間たちとも稽古のあとでおしゃべりしたり遊んだりしていい思い出になりました。

玄武館道場がなくなると寂しいけど、楽しかった思い出は忘れずにいます。玄武館道場で学んだことはこれからの人生に活かしていきたいです。高松先生、どうもありがとうございました。



娘とともに

荒 金 典

(荒金 慶さんの母・剣道4段)

玄武館道場での稽古は、私にとって自分の心と向き合う修行のようなものでした。

小中高と学校の部活で剣道をしていた私は、剣道を勝敗にこだわるスポーツとして習得してきました。大人になってから剣道を再開してみれば、高松先生のご指導を受けながら、なんと奥が深いものかと稽古のたびに思い知らされました。

心が乱れているときの稽古は散々ですし、慢心しているときの稽古は先生方にコテンパンに打ちのめされます。平常心で剣道に向き合うのは並大抵のことではありません。というよりも、平常心での稽古なんてまだできません。ただ、稽古が終わった後、汗まみれで打ちのめされているにもかかわらず存外にすっきりとした気持ちで黙想をしている自分がいます。今思えば、その瞬間を求めて稽古をしているのかもしれませんが。

42歳を過ぎて剣道を再開した私を根気強くご指導してくださった高松先生はじめ諸先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。そして、娘と一緒に稽古をさせていただけたことは何物にも代えがたい子育ての記憶に刻み込まれました。

自分の心と向き合う時間を与えてくれた玄武館道場、どうもありがとうございました。



玄武館 ありがとう!!

財 全 優

(大分高等学校2年・剣道部・剣道2段)

「剣道はとにかく基本が大切。試合に勝つことも大事だが、打たれたっていい、真直ぐ一本。そしてもっと大切な事は、剣道を通して、礼儀や友情の大切さ、平常心など、心の学びだ」と、高松右門先生はいつも言っていました。

「打たせてくれてありがとう。打ってくれてありがとう。お相手に感謝の気持ちを持って、そんきよ蹲踞をしなさい」と教えられた意味を、玄武館道場を卒業した今、少しずつ分かるようになってきた気がします。

とても優しく面倒を見てくれた先輩やいつも笑顔で慕ってくれた後輩は、今でも僕にとって大切な存在です。

これからも玄武館道場を通して学んだことを忘れずに、自分らしく、心も剣道も成長できるよう、その教えを大切にしていきたいと思います。感謝。



うれしかった推薦入学

阿部 諒也

(杵築高等学校剣道部・剣道3段)

私が玄武館道場に見学に行ったのは小学5年生の時でした。初めて剣道というものを目に、今すぐにでも始めたいと思いました。

はじめは瀬々先生や入江先生に基本を一から教わりました。そして、防具をつけた時、「これからもっと強くなろう。」という気持ちが芽生えてきました。

中学生に上がった時、日出町の城下かれい祭り剣道大会に出場し、自分の弱さを実感し、くやしかったことを今でも覚えています。

それから、日頃の稽古では高松先生に基本の指導を受け、財前先生や篠崎先生からは、中学生だけの特別稽古をつけてもらったことで、次第に術技が向上しました。そして、中学3年生になった時、県下の高校の先生方から、基本に忠実な自分の剣道を褒めて頂けるようになり、うれしいことに高校の推薦入学を頂くことができました。

伝統ある杵築高校に入った時は、周りの環境に慣れず、剣道をするのが嫌になりました。でも、ここで辞めたら、今まで私にご指導をしてくれた先生方に申し訳ないと思い必死に続けました。現在は主力のチームに選ばれるようになり、自分のやってきた事は間違いじゃなかったのだと感じています。

今の私の剣道があるのは、全て玄武館の先生方のお陰です。ありがとうございました。

特に高松先生には、私に剣道の本質や精神を鍛えて頂き、感謝の気持ちでいっぱいです。



論語の朗読

佐藤 万葉

(別府鶴見丘高校2年・剣道2段)

私は小学校1年生から中学3年生までの9年間、玄武館道場で稽古をしました。

最初は何も分からないまま始め、何度も稽古に行きたくないと思ったこともありました。

それが、中3の引退の時まで続けることができたのは、一緒に稽古した友だちや先生方のお陰だと思います。

玄武館に通った日々の中で、特に思い出深いのは、論語の朗読をしていたことです。当時は意味もあまり理解していませんでしたが、今は何かあった時、これはあの時に習った論語と同じ状況だな、と思うことがよくあります。玄武館で習っていたことが、今の自分の血肉として生きているのだと、とても感慨深い気持ちです。玄武館道場で、剣道の術技だけでなく、生きる上で大切なことを多く学ぶことができて本当によかったです。

高校になってからは竹刀を持つことも少なくなりましたが、久しぶりに父と一緒にお正月の初稽古に参加しました。道場にはいつもと変わらない凜とした雰囲気がありました。

玄武館で過ごした9年間は、私にとってかけがえのない日々であり、大きな財産となっています。これからも玄武館での教えと感謝を胸に頑張りたいです。

話しておきたいこと



きょう 家 しん
龔 家 新

(中国・江蘇省蘇州出身・APU 4年生・
剣道初段)

私は2年前に玄武館に入門しました。

この2年間の勉強(稽古)からこのグループ(道場)で多くのことを勉強しました。高松先生は、日本人や外国人も関係なく、誰にでも熱心に教えます。

私は歴史や刀剣が好きなので、日本が国技とする剣道に非常に興味と関心を持っています。将来、玄武館から離れた後、こんないい道場と先生に出会うことができるだろうかと心配しています。

高松先生の剣道はただの剣道ではありません。心の修練と礼儀の勉強も含めています。

以前、私はある武道具屋さんと一緒に、学校サークルの剣道と道場の剣道の違いについてお話をしたことがあります。その武道具さんは「現在の学校剣道は、ほとんど試合向けの剣道。だから、道場の剣道は別のシステムとして考えた方が良い。」と聞きました。

私は、別府に来て玄武館で正しい剣道の勉強をすることを非常にうれしく思っています。剣道の道はまだ長いので、日本の剣道をしっかり勉強したいと思っています。

また、多くの人たちも剣道のグループに入りたいです。

日本のこころを育てる場



デリト・モニカ

(アフリカ・ケニア出身・剣道2段)

(社会福祉法人・別府光の園職員)

今年の新年の稽古始めは、例年と違う雰囲気がありました。

昨年暮、「来年1月末に玄武館道場を閉める」という高松先生のお話を聞いて驚きました。

そのこともあってか、道場の壁には、大きな墨文字が書かれた剣道の手拭いが沢山張られていました。

書かれた文字は、私にとっては意味の分からないものばかりでしたが、高松先生にお聞きすると、その言葉は、古くから伝えられた儒教や剣道の古典の教えで、剣道の心の修業をする上で大切な言葉だと教えてくれました。どの手拭いに書かれた言葉の意味もまだ分かりませんが、私も少しずつ理解したいと思いました。

昨年から新型コロナウイルスの感染が拡大し、子どもと大人が一緒にしていた稽古時間を、2班に分けて行っています。

新年の稽古始めは、久しぶりの合同の稽古でした。いつもより激しい稽古で、マスクやフェイスシールドしていると息切れがして、自分の心臓の音が聞こえるくらいでした。いつの間にか子どもたちの数も増えていて、激しく動く稽古を見ながらその上達ぶりに驚きました。

稽古の後、道場のことを考えました。

玄武館道場の第一印象は、「道場は先生たちの家」だということです。

一緒に住む家とは言えないけど、様々な先生たちが、伝統的な価値観を重視し、鍛える場所です。私たちは学生（門人）として、自己規律を訓練し、改善し、自己の精神を構築するためにそこで学びます。

それぞれの教師には独自の教え方があります。例えば、ある日、財前先生は一人の中学生に長い時間稽古をしていました。その生徒のために、体力をつけ、剣道を強くし、何事にも耐える気持ちと礼儀を教えることでした。

私は道場の中で沢山のことを学びました。

道場は単なる建物ではなく、剣道と伝統文化に根差した神聖な場所です。玄武館道場は心身の鍛錬などを行う場所です。何世代にわたり、剣道の歴史と文化を受け継いでいます。

私は5年前に留学生として剣道を始めました。

私は道場の稽古に参加し、新しいコミュニティ、教師、親、子どもたちと接しました。道場では、日本の文化や言語を学び、友だちを作り、自分に自信をつけました。

昨年4月、緊急事態宣言で道場が休館になった間、私は道場を見るために何度も散歩をしました。春木川の土手の石の間に紫色の花が咲いていました。玄武館道場がとても美しい所に建っているな、と思いました。

私にとって、一番自分の心が癒されるのは、一年中流れる春木川の穏やかな音、道場の屋根にあたる雨の音、夏は暑い熱気、秋は涼しいそよ風です。

玄武館道場は、私にすべてのことに感謝の気持ちを込めて生きていく、という態度を育ててくれました。

一歩前に



神 一 貴

(大分市在住・設計事務所兼ミュージシャン
・剣道2段)

閉館のお知らせに驚くとともに長年のご指導に感謝の気持ちでいっぱい
です。

高松先生をはじめご指導してくださった多くの先生方、ありがとうございました。

私が玄武館に入門したのは20年前です。小学一年生の私は剣で戦うゲームに心奪われ、自分も剣を振り回したいと思い剣道を始めました。しかし、稽古を始めると、剣を振り回すイメージはガラッと変わりました。

剣は自分の心を表すことを教わり、無闇に竹刀を動かさず集中して構え、相手の心の隙を見て打ち込むという剣道の奥深さを知り、次第にひかれていきました。

持病の喘息の発作がひどいとき、上級生や入江先生のコテが痛くて泣きたくなり、稽古をサボりたくなりましたが、稽古を終えて防具を外した時の清々しさと達成感が気持ちよく、気づけば10年も稽古に通っていました。

引っ込み思案だったあの頃、鏡開きのおぜんざいを最後に戴きに行っていた私も、仕事の傍ら全国のステージでドラムの演奏をし、ショップや書店で自分のCDの流通が果たせる迄になりました。これも玄武館での稽古で培った忍耐力や学んだ一期一会を大切にしてきたおかげです。

剣の道とは異なりましたが、これからも玄武館で学んだことを忘れず、自分の道を精進していきたいと思います。

今に生きる教え



財 前 和 典

(陸上自衛官・剣道4段)
(財前先生のご子息)

歴史ある玄武館道場の一区切りに際し、少しばかり思い出に浸りたい
と思い筆を取りました。

私が玄武館に入門したのは、今から20年前でした。熊本から来たばかりの父と私を快く迎えてもらい、剣道の基本と精神をご指導して頂いたのは高松先生のお陰です。

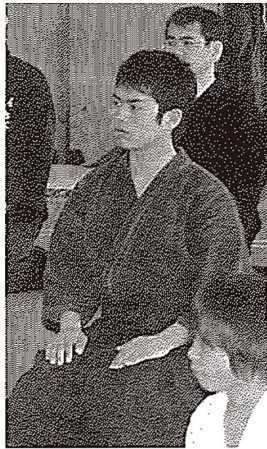
小学校の頃、厳しく愛情のある熱心なご指導を頂いた日々は今でも忘れません。終わりのない跳躍素振り、なかなか終了太鼓の音が鳴らない懸かり稽古、そしてお正月の鏡開きには、奥様手製の美味しいぜんざいを頂いた事も懐かしい思い出です。

高松先生からは、剣道だけではなく、人間性、武人としての誇り、人としてどうあるべきかなどを、孔子や孫子などの教えを基に、私たちに諭して頂いた事は、今の生活や仕事などに大きく活かされています。

先生の教えのお陰もあり、四段まで昇段することができました。また、現在は、陸上自衛官として勤務しており、任務の中でも当時の教えを活かして邁進しています。

私の剣道人の始まりは、玄武館に始まりました。感謝の念は尽きませんが、高松先生の教えを次世代の剣士たちにも伝え、継承をしていく所存です。

最後になりましたが、玄武館ならびに高松右門先生に心から感謝の念を申し上げます。



稽古で身に付いた根性

吉 富 匡 平

(東京都在住・フランス料理副料理長・剣道初段)

私は小学4年生から玄武館で剣道を始め、中学1年まで続けました。高校の部活動は剣道部がなかったので、他の部活動を終えた高校3年の9月から、玄武館で剣道を再開し同時に居合道も始めました。

私が特に覚えているのは、夏の暑い時の汗だくの稽古や冬の寒い時の道場の寒さ、掛かり稽古など、きつい思い出ばかりです。しかし、そのきつい稽古の中で、頑張るということを覚え、根性ができたと思っています。

この根性は、高校の部活で部長をやり遂げたことや、料理の修行中にきつい事があっても乗り越えることにつながり、私の心の中に強く影響を与えています。

高校3年生の時に再開した剣道では、やり残していた初段昇段を達成した事が良い思い出となっています。

また、同時期に居合道を始めたのも良い思い出となっていますが、進学のため7ヶ月くらいしかできなかったことが今でも心残りになっており、仕事や生活が落ち着いてきたら再開したいと心に秘めています。

玄武館で剣道をやった根性と礼儀は、今の私の人生の基盤になっています。指導して頂いた館長の高松先生をはじめ多くの先生方、本当にありがとうございました。

卒業稽古会（立ち切り稽古）



後藤 聡

（国立大学法人帯広畜産大学

獣医学研究部門教員〈博士〉

獣医師・剣道3段）

1996年の春、北海道の大学へ進学することが決まった私に、高松館長は玄武館道場伝統の卒業稽古会（立ち切り稽古）を催してくれました。

その稽古会は、道場に通う幼稚園の年少剣士から一人ずつ、学生、社会人、そして恩師の先生方の順に、私一人が総当たりで地稽古をつけていただくというものでした。

今となってはその稽古数が1人対30人であったか40人であったかは定かではありませんが、目の前に立った豆剣士の姿に幼少期の自分自身を重ねたこと、多くの先生方に稽古をつけていただき疲労困憊となったことをよく覚えています。

立ちっぱなしの私の体力が限界を迎えた頃、元立ちに入江先生が立たれました。その瞬間を今でも鮮明に覚えています。入江先生を目の前にした途端、急に涙が溢れてしまいました。涙が止まらない自分自身に動揺し、周囲に悟られまいと声を張るのだが涙声で震えてしまふ。私自身、入江先生に愛情を注いでいただいていたことを実感した瞬間でした。

最後に元立ちに立っていただいた高松館長に必死で立ち向かった時には、涙が溢れ、体も気持ちもぐちゃぐちゃになりながら懸かったことは言うまでもありません。

高松先生、本当にありがとうございました。そしてお疲れ様でした。
今後も玄武館の教え、“守破離”に精進します。

個性を生かした指導

岸川 篤岐

（埼玉県在住・会社員・剣道2段）

玄武館には、小学校6年生の終わりから19歳までお世話になりました。

剣道は小学校3年生から4年生の終わりまで香川県で学びましたが、別府市に転居して以降、5年生から6年生の終わりまで、別府市内の別の道場でお世話になっていました。

しかし、その道場では剣道の方向性が私に合わず途中で辞めてしまいましたが、玄武館で高松先生などの指導を受けることになって以来、剣道を続けることができました。

玄武館では、私たち子どもの各々の個性を生かした指導をしていただけました。だからと言って、自分勝手に自由な稽古が出来るというわけではありません。

ポイントポイントで厳しく指導していただき、このことがその後の社会生活の中にも生き

ており大変感謝しています。

現在は埼玉県に住んでいますが、あの頃玄武館で学んだ礼節、気合い、思いやりなどの精神を生かして頑張っています。

閉館してしまうのは寂しい限りですが、今まで巣立っていった門下生の中に、玄武館の想いは生き続けて行くと思います。今日までありがとうございました。



一枚の絵

丸尾隆吉

(福岡市在住・歯科医師・剣道2段)

小学校3年の秋、春木川小学校体育館で高松先生に出会い、玄武館道場の開館を経て竹刀振りの道に入りました。

思い出話と言えば、昇段審査や試合の勝ち負けのこと、防具の臭い、寒稽古の床の冷たさ、足裏の皮が剥げた痛み、上達できないもどかしさなどを笑顔混じりに語ることが多いが、私の心に強く残るのは、玄武館道場の鉄骨のペンキ塗りです。

当時小学生だった私は、背景にある大人の話のことは知らず、ペンキ塗りの楽しさが一番でした。しかし、今では楽しさよりも高松先生の後ろ姿が強く印象に残っています。

その時の私は、敷地に並んだ古い鉄骨に黙々とさび止めのペンキを塗る高松先生の背中に、何を見て、何を考え、じっと目に焼き付けたのでしょうか。

35年以上も心から離れないその1枚の絵は、少年たちのために道場を建てる、という「自分の想いを形にしていく」高松先生の姿に、いつか学ぶためだったのかもしれない。

「玄武館の剣道は、試合に勝つ剣道じゃないけど・・・」と、先生は笑いながらお話されますが、40代後半になって振り返ると、歯科医師として20年の私の人生は、勝ち負けなど存在しない、正解がない医療の道で自分を信じてきました。

仕事なので当然ビジネス的要素や尺度もあり、他の人から「損しているね」と言われることもありましたが、心の充実と強さは、損得よりも大切なのだと考えています。

私は玄武館の稽古を高校生の途中で止め、そのまま別府を離れました。

しかし、高松先生と玄武館が私の心から離れないのは、小学生の時に焼き付けた高松先生の姿から学ぶ思い出があるからでしょう。

一緒に稽古をした道場仲間数人の状況を聞くと、それぞれ自分の信じる道を進んでいるようで、最後まで稽古をきちんとやり遂げた同級生の友人は大学の教授になったらしい。稽古をやり切った友人と中途半端だった私の差はちゃんと表れている。

私は一生の思い出の1枚の絵を追いかけて人生を修業して行くのだろう。



守 破 離

河 野 俊 輔

(九州産業大学教授・工学博士・剣道2段)

冬になると思い出すのは、夜明け前の真っ暗な中で始まる寒中稽古。板の間に踏み込んだ瞬間の足裏の冷たさと頬に伝わる場内の凜とした空気である。

私が玄武館に通い始めたのは、実相寺町に移り住んだ小学校6年生の夏の終わり、昭和60年の9月頃でした。当時は、小柄で体力も無く、声が出せることくらいしか取り柄がなかったので、ともかく元気だけは負けたくないとの一心で剣道に通い始めた覚えがあります。

私にとっての先生は、高松先生、入江先生、古沢先生の3人で、先生方に加えて藤原先輩と同級生（丸尾、岸川君）が居てくれたお陰で、高校を卒業し大分を離れるまでの約6年間、道場に通い続けることが出来ました。

高校生になってからは体力もそれなりに付き、次の移住先となった大分市から自転車で日曜の稽古に通っていたことも懐かしい思い出です。

肝心の剣道の技術は恥ずかしながら上達させることは出来ませんでした。代わりに「続けることで知った楽しさ、見える景色」を体感することが出来ました。

この「継続は力なり」の経験が今に至る無形の財産として、研究者としての私の生き方を支えていると思っております。

この先、帰省時に玄武館の建屋と看板を見る事が出来なくなることは大変寂しくかつ残念でなりません。そう考えていた時に思い出されたのは、私の結婚披露宴の際に高松先生より頂いた手拭いに書かれた「守・破・離」の言葉でした。

私はまさに今、心身共に「離」の時期に来たのかもれしれないと思っております。かつての自分の様に一心に稽古を続ける息子を見守りつつ、私が自分なりに残し伝えることのできる無形財産みたいなものは何か、を考えながら毎日を大事に生きていこうと思っております。

こころの中の玄武館

藤 原 稔

(大分県警察・玄武館第1期生・剣道4段)

私は6歳から春木川小学校にあった「中須賀東町少年剣道クラブ」で剣道を始めました。クラブ発足当初の指導者の先生が大分を去ることになり、その後の指導を高松先生に引き受けて頂きました。

間もなく、高松先生から「道場を建てる」というお話をお聞きし、休日には子どもたちも

一緒になって、鉄骨の錆び取り、錆止めのペンキ塗りを一生懸命にしたことが、昨日のことのようによみがえってきます。床はボーリング場のレーンで、とても硬かったですが、自分たちの道場ができてとても嬉しかったです。

以後、夏季には道着が絞れるほどの汗をかき、冬季は氷のように冷たくなった床の上で、入江先生、古沢先生をはじめ、多くの先生に稽古をつけて頂きました。中でも、玄武館本道場の糸永騏郎先生をお呼びして稽古をつけて頂いた時には、どんなに頑張っても、先生の構えさえ崩すことができず、「修練を積むとここまで達するのか」と驚嘆した記憶があります。

その外、毎年暮れの餅つき、鏡開きのぜんざい会、卒業時の立ち切り稽古などなど、沢山の思い出は尽きません。

玄武館道場では、人生に大切な「心」も沢山教えて頂きました。一緒に稽古した仲間に対する心、自分と向き合う心など、今も生きています。

最近竹刀を手にする機会も少なくなりましたが、道場訓にある「剣を学ばんと欲すれば、先ず心より学ぶべし」を胸に、正しい道を探求していきたいと思います。

いつでも、どこにいても「玄武館道場」は常に心の中にあります。

交 剣 知 愛

小 池 健 輔

(九州大学病院別府病院・研究員・剣道4段)

私は、昨年夏、別府に転勤して参りましたが、少し余裕もでき、十数年ぶりに剣道を再開しようと思い玄武館の門を叩きました。まだ短い期間ではありますが、今では玄武館に通わせて頂き大変良かったと思っております。

平日の稽古では基本をととても大切にしており、剣道にとって基本がいかに重要かを改めて学ばせて頂いております。また、土曜日の稽古は、県下から来られる多くの高段の先生方に稽古を戴き、更に社会的に幅広い立場にある方々とも稽古させて頂けることに感謝しています。

玄武館道場には多くの先生方や剣友のみなさんが稽古を積まれた歴史の重みを感じ、高松先生をはじめ玄武館の先生方が今まで培われた伝統があつてこそだと思えます。

この貴重な稽古をご一緒させて頂く喜びとともに、部外者の私を快く受け入れて下さり改めて頭が下がる思いです。

道場の稽古はまだ数ヶ月ですが、私にとって玄武館での稽古は大変貴重な経験となっております。ありがとうございました。

憧れの玄武館

栗 林 尚 史

(愛媛県剣道連盟事務局主任・銀行員)

(居合道教士7段・剣道3段)



私は愛媛県出身ですが、数年前、勤務地が大分に転勤となりました。

大分在住中に居合道と剣道が両立出来る環境を求め、大学の先輩であり大分県剣道連盟副会長を務める東義信範士八段から、居合道の同じ流れを汲む高松先生をご紹介いただいたご縁で玄武館に通いはじめました。

中学の部活動で剣道を始めて以来、稽古は学校の体育館のみで道場に通った経験がなく、道場という空間にそこはかとなない憧れを抱いていた私にとって、玄武館はまさに理想の道場でした。

全員で口を揃えて唱和する道場訓、稽古後の高松先生の講話、壁には、近藤知善先生、糸永駿郎先生の額や写真、お歴々の名札、先人の教えや稽古心得の掲示など、挙げればきりがありませんが、歴史を感じる道場の雰囲気はただの稽古場所ではなく、心の拠り所として存在していました。

また、剣道を通じた人間形成のみに留まらず、地域・国際交流など多岐に亘る活動を実践してきた玄武館という空間は、高松先生のお人柄を慕い賛同される先生方、そして門人の方々のご尽力の上に成り立っていたのだと改めて感服するとともに、短期間ではありましたが、私も同じ空間で精進出来たことを誇りに感じております。

閉館の寂しさは拭えませんが、活動を継続される方々の今後益々のご発展とご活躍を愛媛から祈念しております。本当にありがとうございました。

もののふ 心に映る武士の姿

松 永 忠

(社会福祉法人・別府光の園施設長)

高松理事長さま、いつも光の園の子どもたちを見守ってくださりありがとうございます。

皆さんはご存じでしょうか。

玄武館の高松館長は、もう30年以上も前から児童養護施設・光の園の子どもたちを支えて下さり、現在は理事長(愛称・おじいマン)として言葉にできない位大きな責任を背負って

くださっています。

随分前のことですが、玄武館道場に剣道の稽古に通っていた子どもたちもいます。そのうちの一人は（もう40歳くらいですが）現在警察官になり、立派な社会人として頑張っています。彼が警察官になった時に聞いた話です。

「館長の奥様が、お下がりの胴着をきれいに洗って、綻びを繕ってプレゼントしてくださった。それを着るのがうれしくて、うれしくて稽古に通っていた」と。玄武館の一番の思い出です。

実は、私は高松理事長さまの剣道、居合道に打ち込む姿を一度も拝見したことがないので。しかし、光の園の子どもたちへのさりげない自然な姿から「武士の心（精神）」が伝わってきます。

先生の著書「母の武士道」を繰り返し拝読しながら、玄武館道場で多くのお弟子さんたちに伝えようとしている心に共感しています。



6段・ストレート合格

篠崎大司

（別府大学文学部教授・~~株~~篠研代表取締役
剣道6段）

思い起こせば2001年ごろ、「気晴らしに、大学の頃までやっていた剣道を再開しよう。」と思い立ち、玄武館道場に入門しました。

稽古初日。9年ぶりの再開にもかかわらず20代の感覚ではしゃいでしまい、結果過呼吸でダウン。しばらく道場の隅で大の字になって倒れるという、思い出だけでも赤面してしまうようなみっともないスタートで、高松先生に大変ご迷惑をおかけしました。

その後、高松先生をはじめ、瀬々先生、入江先生、財前先生など、たくさんの先生方に稽古をつけていただき、剣道のいろはから教えていただきました。

おかげさまで、入門当初は初段だったのが、二段から六段まで、昇段審査は1度も不合格になることなく、一発合格を果たすことができました。先生方の熱のこもったご指導にはいくら感謝しても感謝しきれません。

また、剣道の技術の習得にとどまらず、人としての正しい生き方についても高松先生はじめ諸先生方の背中から多くのことを学ばせていただきました。

道場が掲げる「正々堂々」「文武不岐」の精神、そして道場訓である島田虎之助の言葉「剣は心なり 心正しからざれば 剣又正しからず 剣を学ばんと欲すれば まず心より学ばべし」は、私の剣道人としての道標となっています。

さらに、少年少女剣士との稽古も私にとっては人生を豊かにしてくれた大切な経験です。

入門時は半袖短パン普段着の小さなお子さまが、すり足を学び、竹刀の持ち方を覚え、素振りができるようになり、胴着袴を身につけ、面をつけて通常稽古に参加し、さまざまな技を習得し、道場や学校の代表選手として試合に出場し、年下の子どもたちを指導する。そういう剣士の成長を特等席で目の当たりにできたことは指導者冥利に尽きる一言です。

この他、高松館長に「玄武館通信」の発刊を提案させていただいたことも私にとってはありがたいことでした。玄武館通信の最新号は140号ですので、11年以上続いたこととなります。先生には毎月の原稿作成にも嫌な顔一つせずご執筆して頂き、まさに脱帽（剣道なので「兜を脱ぐ」でしょうか）としか言いようがありません。長年に亘るご指導や道場運営に心から感謝の意を表したいと思います。

今後も玄武館魂を胸に私の次の目標、「七段一発合格」を目指し、その証書を高松先生にご覧頂けるよう稽古に励みたいと思います。

父子で過ごした貴重な時間

吉 冨 智 昭

(大分県庁剣道部・剣道6段・居合道5段)

私が長男立樹、次男匡平と一緒に玄武館に入門したのは平成13年でした。

小学生だった立樹と匡平が剣道を習いたいといってきた時、自衛隊別府駐屯地で行われた剣道大会の試合の後、高松先生の廻りに多くの子どもたちが集まって楽しそうに話していたのが印象的だったので、自分の子どもたちもその輪に加えてもらいたい、と考えたのが玄武館道場入門したきっかけです

当時、私も剣道を続けていたので、子どもを玄武館道場に連れて行き、親子一緒に稽古をしました。

礼に始まり礼に終わる剣道を自分の子どもに習わせて、一緒に道場訓をそらんじ、一緒に汗をかくという、共に過ごす時間を共有することができたのは、今になって思えば大変貴重で有意義な経験でした。

その後、子どもたちが学校を卒業しても私は玄武館に通い続け、職場の剣道部の稽古場所としても使わせていただき、平成21年からは居合も習い始めて今日に至っております。

これまで大きな病気をすることもなく、心身とも健康に過ごすことができたのは、「継続は力」とのことばのとおり、玄武館で剣道と居合を続けることができたからであり、高松先生を始め指導いただいた多くの先生に大変感謝しております。

そのような思い出のある玄武館道場がなくなることは大変さびしいですが、玄武館道場の精神はこれからも生き続けると思います。

剣の道から弓道へ

山口 秀 明

(元大分みらい信用金庫職員)

(大分地方裁判所司法委員・剣道5段)

志を成就された喜びと、築き上げたものを無くす淋しさ、「残心を振り切って決断した」と言う先生の心情を察するに言葉にできません。

私にとって高松先生は、同じ職場の時代から人生の師でした。一步でも近づきたいとの思いで、沢山のことを学ばさせていただきました。73歳になった今でも、その思いは変わりません。

道場には、時々見学や稽古にお邪魔しましたが、かつて稽古をつけて頂いた時「山口君の剣は、肉を切らせて骨を断つ太刀筋だね」と言って頂いた事が良い思い出になっています。

その後、交通事故で全身9か所を骨折する重傷を負い、人工関節になりましたので、剣道が出来なくなりました。しかし、元来武道が好きなので、足腰に負担の少ない弓道を始めました。現在2段です。可能ならば、今後は禅や茶道の勉強もしてみたいと思っています。

交通事故では、「普通」のことが「普通」にできることの有難さを思い知りました。一時は心肺停止の重体でしたので、戴いた余命と思って、社会に役立つ毎日を送りたいと思っています。



忍耐と愛情

勝 田 一 誠

(悠々自適人・剣道3段)

私が玄武館に入門したのは64才の時です。若い時分には柔道、ラグビーなどのスポーツに親しんだものの、剣道については竹刀を持つことも初めてでした。

その時から早9年が経ちました。

9年間の稽古を通して、私が一番感じた事は玄武館の指導のあり方です。

どんなスポーツにおいても、その技術、テクニックを教えてくれる指導者はいても、高松館長のように、その心の部分を教えられる指導者はなかなかいなかったと思います。

文と武、技と心はまさに武道の両輪であり、そのことを玄武館での稽古を通じて私は感じ

取りました

特に記憶に残る指導法は、子どもたちにいちいち細かな注意をせず、じっと我慢して見守り、彼らの自発性が生まれて来るまで待つ、という子どもたちへの愛情でした。

未完成の子どもたちに技の向上を急ぐあまり、子どもたちの自発心を殺してしまう、角を矯めて牛を殺すという指導法が世の中にはなんと多い事でしょう。

しかし玄武館では、「エッ！ あの子がこんなに変わった？信じられない」という子どもさんたちを何人も見てきました。

慌てず、焦らず、じっと自らが変わろうとする自立心や向上心が芽生えるまで忍耐強く、見守りながら待つ、これこそ指導者にとって必須な条件と感じました。